

→「鵜殿の葭原焼き」と小説『淀川八景』

2023年4月9日(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第579回 参加報告

その後、達治は詩誌「詩と詩論」「詩・現実」創刊を経て、第1詩集『測量船』(1930年)を刊行。1934年、詩誌「四季」を堀辰雄らと創刊、四季派と呼ばれる新詩人のグループを形成した。『南窓集』(1932年)、『閒花集』(1934年)などでは、自然な感情を4行の平易なことばで表した。太平洋戦争が始まると達治は日本の勝利や日本の国家国民を賞賛称揚する「戦争詩」を複数制作し、『捷報いたる』『寒柝』『干戈永言』といった詩集にまとめて発表。日本文学報国会から委嘱されて「決戦の秋は来れり」の作詞も手がける。達治の詩業にとってもこの詩集がその汚点となり無限の悔恨となったと指摘される一方、軍隊経験がある達治の「戦争詩」の一連は決して戦争への賛美ではなく、彼の詩には、彼が国家主義者ではなく、亡くなった兵士ら一人ひとりへの敬意と追悼をうたう詩人であることは明らかである。戦後の『駱駝の瘤にまたがって』(1952年)は、その詩業の到達点ともいえる。

詩のほかに、多くの鑑賞文や随想集なども執筆している。この時代に戦争の影響を受けなかった人は少ないだろうが、達治も時代に翻弄されながら1964年に急逝している。知人であった宇野千代は、他人から見える達治は「いつでも正気で端然としていて、節度を守っているよう」で内面は「それと反対で、いつでも狂気で、節度を外し、惑溺するに任せていたのではないだろうか」とし、「その両面が、あの三好さんの高揚した詩になる」と分析している。記念館の中で、ご住職が三好達治の事は随分誤解されて見られていることが多いが、それが全てではありません、と強調された。我々は作品や作家の一面しか見ず、それがあたかも物事の全てだと思ってしまう事が往々にある。幅広く柔軟な眼で見ることの大切さを学ぶ機会となった。

境内での昼食後「鵜殿葭の原碑」へと歩く。鵜殿は淀川河川敷の上牧と前島の間広がる約60haの地で葭などの大型湿性植物が群生する地である。鵜殿の歴史は古く、『土佐日記』に紀貫之が鵜殿で宿泊したと記されている。防波堤沿いに少し歩くと、おおきなしっかりした字で刻まれた「鵜殿葭の原」の石碑がある。明治8年

(1875)に始まる淀川改修100周年を記念して建立されたものである。横に



鵜殿葭の原碑

説明板があり、徳川幕府が治水対策として葭を刈ること事を禁止したが、村人たちは京



淀川河川敷

て作られていて、音がまっすぐなばかりでなく、微妙に揺れるのですと話された事を思い出した。まさにこの鶉殿の葎の事だった。そして箏篳の音色はシルクロードを通り、ヨーロッパでオーボエになったと聞く。世界的広がりの一翼を鶉殿の葎が支えていたと知ると、今日この地を歩けたことは嬉しい事だった。その後上牧駅に戻り解散となった。

阪急上牧駅すぐそばの福井商店は、昔からの米穀商ながら今も良く売れているようで、当日は参加者の多くが「たけのご飯の素」を購入されていた。その日の食卓にたけのご飯が上がり、ウォーキングでの話になった事であろう。それにしても、70代は石や階段に躓いて転ぶが、90才は立ったままでも転ぶそう。ウォーキングに参加して、頭も足腰も鍛えなければならぬと思った1日だった。

<報告：津田系子>



上牧駅前 福井商店